



産学連携の視点から、9年間にわたる「開物成務塾」の実践について発足の背景と目的、経緯を振り返り、併せて成功事例を取り上げた。具体的なプラットフォームの形成、個別活動内容を取り上げるとともに、会場からの質問を受けて、学生の雇用促進、COC+との関係、行政からの支援内容の報告が行われた。

2件目は、高谷ら（開物成務塾）が、開物成務塾活動の中で中小企業の経営開発・商品開発およびマーケティング実践ワークショップの全体像を取り上げた。前半部分で同塾の発足の背景と目的及び概要の説明がなされた後に、前記の実践ワークショップでの発表案件と成果を扱い、最後にこれらの手法の延長として、全国各地との相互交流等の方向性の報告が行われた。

3件目は、綾戸（一般社団法人ふるさと創成の会）が、実践ワークショップの中で、ふるさと創成の会が手がけた事例を取り上げた。そこでは、自然資源有効活用の視点から、地方で既存事業が消滅した地域を対象とした地域循環型経済の再生を扱っている。具体例として、星野村・矢部村での連携活動としての甘茶・里山名水・竹林活用の商品開発、そして大学と連携したマイクロ水力発電所構想の報告が行われた。

4件目は、岩崎ら（開物成務塾）が、中小警備会社の新ビジネスモデルとして、重度障害者を含む障害者を従業員の半数弱雇用する警備会社の事例を取り上げた。中小警備会社を出資者とした共同出資会社を設立することで、大型案件を共同受注することや、共同出資会社間で従業員のやりとりを行うリスク回避の話の後に、共同による障害者雇用の具体例等の報告が行われた。

5件目は、小橋（株式会社ミルテックジャパン）が、開物成務塾活動の実践として、建築物カビ防除システムの商品開発から事業化に至る経緯と今後の展開を取り上げた。そこでは、旧社名から変更した理由あるいはホームページ改良の意義と、今後の展開並びに既存技術をベースとした応用技術開発の報告が行われた。

---

産学連携論 4

座長 中武貞文／鹿児島大学

6月16日(金)第2日目C会場(10:30~11:45)

「産学連携論4」セッションでは、地方大学における産学連携の実態とこれからのあり方に関する発表が行われた。佐藤（佐賀大）、北村（島根大）、内島（北見工大）は、「地方大学における産学共同研究の実情解明の実証的

研究」と題して、2004年から2013年度の期間における地方大学の共同研究相手先の地理的分布に関する一連の発表を、佐賀大学、宇都宮大学、北見工業大学と大学毎の分析を行い、さらにこれら大学間の比較を行った。佐賀大学では、2004～2008年度と2009～2013年度とを比較すると、大企業を相手先とする共同研究は横ばいであったが、中小企業を相手先とする共同研究は若干減少したとのことであった。宇都宮大学では、共同研究の相手先が大企業の場合、栃木県を含む関東地方で78%を占めており、中小企業でも栃木県、関東地方に位置する企業との共同研究が多い傾向にあるとのことであった。北見工業大学では、中小企業との共同研究が半数を超えており、北海道内・関東地方内企業の比率が高く、大企業に関しては関東地方に所在する企業との共同研究が恒常的に高いとのことであった。一連の発表の総括を北村（島根大）が行い、大学間の比較から、地方大学は、地方の企業との連携関係が深いと捉えられがちであるが、大企業との共同研究が活発であり、分析対象の期間においても横ばい、ないしは増加傾向にあるとのことであった。また、中小企業に着目すると、大学が所在している県内企業との共同研究は減少しているとのことであった。

木村（静岡大）は、浜松地域の工業発展の系譜を踏まえた静岡大学の産学連携戦略や大学改革の状況を発表した。人口減少が著しい静岡県において若者定着を進めるためのCOC+事業や地域創造学環等の取り組み、地方創生に資する産学連携を進めるために海外のシステムも参考しているとのことであった。

本セッションを機に、地方大学の産学連携が前進することを期待したい。

---

以上